

氏 名	金 湘 斌
生 年 月 日	
本 籍	
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	人博甲第 25 号
学位授与の日付	平成 25 年 3 月 22 日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第 4 条第 1 項）
学位授与の題目	纏足から天然足へ：日本統治前期（1895～1925 年）台湾における 学校女子体育に関する研究 (From Bound Feet to Natural Feet: A Historical Study on the Development of Female Physical Education in Taiwan Schools During the Early Years of Japanese Rule (1895-1925))
論文審査委員	委員長 大久保英哲 委 員 加藤 和夫, 松下 良平 岩田 礼, 古畑 徹

学 位 論 文 要 旨

纏足の風習は、旧中国における女性を所有物にする伝統的な礼教規範に端を発し、敢えて足部に不自由を与える身体改造施術であり、台湾でも古くから行われてきた。一方、日本が女子体育を学校に導入することは、富国強兵に基づいて近代国家の一国民として丈夫な身体を持った母体を生み出す国家管理だった。日本の帝国主義化による植民地の拡大に伴い、纏足と体育は日本の植民地—台湾で出遭った。こうした結果、日本統治前期において纏足の気風や習慣を改めることと、纏足女子へ矯正を如何に実施するかという問題は日本植民地政府の重大な関心事にならざるを得なかった。また、纏足による行動の不自由は、台湾で学校女子体育を実施する際に解決しなければならない厄介な難題であった。加えて、殖産興業を支える国家的身体への規律訓練という身体改造工程にとって克服しなければならぬ大前提であった。

1895 年に成立した日本植民地政府が、台湾において近代女子体育を導入し始めた当初、纏足という社会風習の存在は、女子体育の実施に大きな障害となった。その後、日本植民地政府及び台湾社会的リーダー階層による解纏足運動は順調に台湾社会に浸透し、1915 年 4 月 15 日、台湾総督府は全面的に纏足禁止と解纏足奨励を実施した。これによって、台湾における女子の「三寸金蓮」の時代は終結し、以後台湾人女子は新しい時代に踏み出したといえよう。しかし、纏足が全面禁止されたものの、1920 年代に至っても、纏足風習が女子体育あるいは競技スポーツの発展の阻害となったとの記述がみられる。すなわち、纏足風習は 1915 年以降も女子体育に様々な影響を及ぼしたのである。

こうした、台湾における学校女子体育の纏足から天然足への変遷過程を解明するため、日本統治前期（1895-1925 年）の植民地政策に基づき、台湾における纏足→解纏足→天然足の移行と学校女子教育を対応させつつ、その中で学校体育がどのように実施されていたのかを、主に初・中等学校を中心に、史料実証的に明らかにする。その結果、以下の三点が明らかになった。

第一に、1895-1925年には、日本の台湾植民地政策は、国内・外の時勢に鑑み、恩威並行政策→人種差別政策→内地延長主義政策へとその方針を変遷させていった。纏足の問題では、1895年の放任主義、1897年の漸禁政策、1915年の強制的な纏足禁止の方針へと解纏足運動の強化を図った。その結果、台湾社会の纏足率は1905年の約6割から1915年の約2割へと大幅に減少した。1915年の纏足禁止によって纏足習慣は一挙に打破され、台湾の纏足者は漸減したものの、1917年に至っても、解纏足者が未だ数多く存在したため、纏足の影響は台湾社会から直ちに消えたわけではなかった。

漸禁政策から纏足禁止へ移行する時期について、台湾総督府は強制的には纏足を禁止しなかったが、水面下で様々な方面から解纏足運動を推し進めていた。注目すべきは、1906年以後、解纏足運動の推進者たちは纏足が身体・社会・経済において悪影響を及ぼすことを指摘すると共に、体育学の観点からも解纏足を奨励するようになってきた点である。要するに、台湾社会では、一部の知識階級ではあったが、女子体育の重要性が少しずつ認識され始めたと言える。

第二に、日本統治初期には、台湾社会において伝統的な儒教の観念、纏足風習、女子教員の不足などが女子教育の発展を阻害する要因となっていたが、台湾人女子が纏足の束縛から解放された後、植民地当局は纏足の問題から転じて女子教育について注目するようになり、台湾女子教育を積極的に奨励し始めた。なぜなら、植民地当局は、台湾女子教育の発展が台湾人の同化政策を推進する上で大きな効果があると認識していたためである。しかし、1925年に至っても、公学校（日本の小学校に相当する）女生徒の就学率はわずか12.55%に過ぎなかった。

一方、学校側の解纏足の状況について、日本統治初期には、公学校女生徒の纏足率は約9割だったが、現場の教員の努力によって在校生の解纏足者が次第に増加してきた。特に、学校において知識として纏足の不便さを女生徒に教えることと、体操、運動、旅行などの活動を通じて身体の不便さを実際に体験させるという解纏足への取り組みは、当時の解纏足運動に多くの実践的・理論的示唆を与えたと考えられる。また、公学校国語教科書に載せられた纏足に関する課文には、解纏足を勧める目的だけでなく、纏足の事例を通じて近代体育の概念を生徒たちに伝えようとした意図も窺える。

第三に、纏足から天然足へ移行する時期には、学校においては纏足者及び解纏足者が減少するにつれ、纏足が学校の体操科の授業に与える影響は徐々になくなっていった。また、植民地教育当局は、纏足→解纏足→天然足という足の状態の変化を考慮し、台湾人女子の体育に関して様々な研究を実施した。これによって、女子体育の実施内容も漸次変化していった。すなわち、①纏足慣行期(1895-1905年)には、整頓進行、唱歌遊戯、表情遊戯、行進遊戯、競走遊戯のような遊戯が中心に行われた。②解纏足移行期(1906-1914年)には、踵にかかる負担を軽減する轉回の二段階化、拳踵の省略のように工夫を加えた体操が実施された。③天然足普及期(1915-1925年)には、体操、遊戯、教練をはじめ、テニス、リレーレース、五十米競走、百米競走、走高飛、三段跳までの競技スポーツが実施された。

すなわち、学校体育が導入された当初、台湾人女生徒は纏足習慣があったため、体操に対する嫌悪感を持ち体操に適応できないという状況に加え、健康の重要性や体操の必要性を理解していなかった。そして、足の状態が徐々に改善されていくにつれ、台湾人女生徒は次第に体操、運動を好む本来の姿を取り戻していったのである。1920年代前半には、台湾女生徒は纏足の影響から完全に脱し、台湾女子体育は日本内地の女子運動熱と同様に急速な発展を遂げ、競技運動への障壁を打破するに至った。

一方、植民地学校の教育者たちは、女子体育が導入された当初、台湾人女子の纏足習慣の改善策に着目したが、女生徒身体の纏足問題を考慮し、体操に代わる遊戯を適宜実施するという消極的な方針を採用した。やがて、本田茂吉、藤黒総左衛門、浜崎伝造などの教員たちは台湾人女生徒に対する体操科の方法を模索・実験し、一定の経験を積んだ後、纏足の問題を徐々に克服することに成功し、遊

戯及び体操を台湾人女生徒に実施することができるようになった。注目すべきは、1907年に浜崎伝造が「異常状態ノ矯正＝特殊ノ方法」という観点で作った「台北庁体操法教程」である。これは纏足女生徒の身体状況に配慮した纏足・解纏足に向けた体操法であり、おそらく世界初の纏足者・解纏足者向けの体操指導書である。

以上のことから、台湾人女子の纏足→解纏足→天然足という三段階の変化は、纏足問題への対応が如何に重要であったかを示している。こうした、障害を有する身体から健全な身体までの身体改造工程を考慮した体育の変容は、日本女子体育史にはみられない現象であり、台湾女子体育史の特徴である。

最後に、日本植民地政府はもともと殖産興業や労働力養成などの経済上の観点から台湾における纏足問題を改革するという意図を持っていたことは周知の事実であるが、その一方で、近代女子体育の立場からみると、女子の身体解放、近代的な衛生、健康及び体育などの観点から纏足問題の改革が図られたことも疑いのないことである。

Abstract

Based on previous studies and historical data, the present study examines the relationship between Taiwanese women's sports and foot binding during the early years of Japanese rule (1895-1925). We intend to discuss in detail the transformation of female physical education in Taiwan schools and to consider the extent to which the colonial project created conditions for the emancipation of women in Taiwan. The practice of female physical education may be divided into three different stages. First, non-interference stage (1895-1905): only games such as singing games, marching games, and facial expression games were emphasized in class. Second, bound-foot liberation encouragement stage (1906-1914): general gymnastics was practiced by reducing the burden of one's heels or skipping the standing calf-raise exercise. Third, natural feet widespread stage (1915-1925): not only general gymnastics but also 100 meters, relays, high jump, and so on were practiced. Generally speaking, Taiwanese women were able to further increase their participation in sport because of the bound-foot liberation movement and the fact that the Japanese authorities were able to change Taiwanese women's body culture successfully. Moreover, the teaching activities aimed at Taiwanese women in physical education class were unique compared with those aimed at Japanese women, which was also significant in Taiwanese female physical education history.

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本統治下台湾における女子纏足事情と初・中等学校を中心とした女子の体育施策の対応関係を史料実証的に検討したものである。かかる視点は従来の纏足史研究には見られなかったものであり、明確な問題意識と人間社会環境に相応しい研究課題の設定を見ることができる。また内外の先行研究はもとより、日本語、漢文、台湾語による新聞・雑誌のほか、2004年頃から台湾において全面公開されるようになった台湾総督府時代の日本語公文書類を精査して、これらの解明に取り組んでいる。こうした先行研究の検討ないし研究方法の設定、及び史料の収集・分析の方法は、研究目的や課題に即して適切かつ妥当なものと評価しうる。

本論文は、日本統治前期に相当する1895年の日本植民地政府成立から1925年に至る約30年間の纏足の観点から、①纏足慣行期(1895-1905年)、②解纏足移行期(1906-1914年)、③天然足普及期(1915-1925年)の3期に区分し、それぞれの期の纏足をめぐる事情とそれに対応した学校女子体育が如何に展開されたかを各章に区分して体系的に検討している。

第1章「纏足慣行期の学校女子体育」(1895-1905年)

1895年には、近代教育が開始され「体操科」も導入されたものの、台湾社会における伝統的な儒教観念、纏足風習が強固であり、植民地政府は事実上放任政策をとらざるを得なかった。公学校女生徒の纏足率は約9割に及んでおり、女生徒たちは体操に対しては嫌悪感を持ち適応できなかった。そもそも健康の重要性や体操の必要性が理解されていなかった。これらのことから、公学校の教員たちは国語教科書に載せられた纏足に関する課文を通して、知識として緩やかに解纏足を勧めるとともに、「体操」や「遊戯」とは言わずに「寺廟参拝」「散歩」「見学旅行」「つかまり鬼」などの遊戯的活動を指導し、纏足身体の不便さを実際に体験させるといった試みが行われた。

第2章「解纏足移行期の学校女子体育」(1906-1914年)

1905年の台湾における女子纏足率は約6割と漸減の様相を示したが、なおその率は高く、解纏足奨励者たちは、纏足が身体、社会・経済面に悪影響を及ぼすとして、積極的な解纏足奨励に取り組み始めた。本田茂吉、藤黒総左衛門、浜崎伝造などの公学校教員たちは体育学の立場から纏足ないし解纏足をした台湾人女生徒に対する体操科の内容や方法を工夫した。そこでは纏足の影響を考慮し、踵にかかる負担を軽減する「轉回」(方向転換のこと)の二段階化や、「挙踵」の省略、二人ないし三人で腕を組み、互いに支えあつての「遊戯」など工夫を加えた体操や遊戯が考案され、実施された。「整頓進行」、「唱歌遊戯」、「表情遊戯」、「行進遊戯」、「競走遊戯」のような遊戯も段階的に本格指導されていった。

浜崎伝造「台北庁体操法教程」(1907年)は、このような工夫をまとめて「異常状態ノ矯正＝特殊ノ方法」、すなわち纏足ないし解纏足女生徒の身体状況に配慮して考案された体操・遊戯法であり、世界に類例を見ない纏足者・解纏足者用の実践的体操・遊戯指導書であった。

第3章「天然足普及期の学校女子体育」(1915-1925年)

1915年の台湾社会における女子纏足率は約2割へと大きく減少した。こうして台湾人女子が纏足の束縛から解放されるに及んで、植民地政府当局の主眼は纏足の問題から、次第に台湾における女子教育の普及・充実に移っていった。1925年の公学校(日本の小学校に相当)における女子就学率は12.55%に過ぎず、日本同化政策(内地延長主義)推進に女子教育の普及・充実が不可欠と判断したためであった。

「体操科」の授業も、纏足者・解纏足者が減少し、天然足者が増加するにつれ、次第に内地延長主義の方向に強化された。1921年には「公学校教授細目上編」が公布され、纏足者への配慮はもはや不要とされ、体操、遊戯、教練をはじめ、テニス、リレーレース、五十米競走などのスポーツが本格実施され、日本と同一内容となった。

1925年、当時の世界的アスリート人見絹枝の台湾訪問を機に開催された「台湾全島女子体育講習会」と「第6回全島陸上競技大会」に初めて女子選手が出場して疾駆躍動する様は、台湾における新しい時代に活躍する「天然足」女子時代の到来を告げる象徴的出来事であり、纏足のお婆さん達をして「狂倒」させるものであった。

本論文は、このように学術論文として体系的に構成され、結論に至る適切なプロセスが論理的かつ実証的に導かれ、それらを裏付ける資料や文献も適切に提示されている。また、浜崎伝造「台北庁体操法教程」(1907年)が世界で初めての纏足・解纏足者向けの体操指導書であることの位置づけ、1925年の人見絹枝の台湾訪問の歴史的意味づけ、纏足をめぐる体育の工夫や展開プロセスなど、従来の台湾教育史・体育史上に見られなかった多くの新たな知見が加えられていると高く評価することができる。さらに、本研究によって見出された、台湾総督府時代の公文書(日本語)、日本語及び漢文体ないし台湾語新聞・雑誌、教科書などの資料もきわめて史料的な価値が高いものである。

以上により、審査員全員一致で博士(学術)学位論文として「合格」である判定した。